

# 生物多様性【DMA,EN12,EN27,EN33,LA10】

## 花王のアプローチ

花王の事業活動は、製品に関わるすべてのサイクルにおいて、生物多様性からのさまざまな恵みに支えられています。将来の長きにわたり生物多様性の恵みを受け続けていくためには、生物多様性を保全し、その恵みを使いつくすことのない利用をしていかなければなりません。花王は、事業活動における生物多様性への影響の低減はもちろん、社会活動においても生物多様性の保全に努めていきます。

## 社会的課題と花王のアプローチ

花王の製品の主要原料でもあるパーム油は、最も生産効率の高い植物油脂であり、人類にとって欠かすことのできない原料ですが、熱帯雨林の破壊という大きな問題を抱えており、花王が生物多様性の保全について真摯に取り組む大きな契機となりました。このパーム油や紙・パルプに代表される原材料の持続可能な調達には、花王グループにおける生物多様性の取り組みの最重要テーマと位置づけており、具体的な目標を定めてそ

の達成に向けて日々取り組んでいます。

これらの活動は、SDGsの目標14「持続可能な開発のために海洋・海洋資源を保全し、持続可能な形で利用する」、目標15「陸域生態系の保護、回復、持続可能な利用の推進、持続可能な森林の経営、砂漠化への対処、ならびに土地の劣化の阻止・回復及び生物多様性の損失を阻止する」に則った活動です。

## 方針

花王では、2010年に、事業活動の生物多様性に関わるリスク分析として、11の関連部門のヒアリングと各部門の代表が一堂に会してワークショップを行ない、花王グループのリスクと課題を抽出し、対策について議論しました。その結果を踏まえて2011年に策定したのが「生物多様性保全の基本方針」です。基本方針では生物多様性条約をはじめとする国際的な取り決め

の遵守も宣言しています。

→詳細は「生物多様性保全の基本方針」と「行動指針と活動事例」  
[http://www.kao.com/jp/corp\\_csr/eco\\_activities\\_03\\_04.html](http://www.kao.com/jp/corp_csr/eco_activities_03_04.html)

### 持続可能なパーム油の全量調達に向けての取り組み

→P123「カルチャー」>持続可能で責任ある調達」

## 体制

生物多様性に関する方針や活動等については、レスポンシブル・ケア(RC)推進体制で管理しています。

→P184「レスポンシブル・ケア活動／体制」

## 教育と浸透

「生物多様性保全の基本方針」を策定した2011年から2012年にかけて、日本花王グループの全社員を対象としたeラーニング(入門編・応用編)を実施しました。その後は、新入社員に対し

生物多様性を含む環境教育を毎年実施しています。

海外については、グローバルRCミーティング等を通じて各社に生物多様性に関する教育を行なっています。

## 中長期目標

### 2020年中期目標

原材料の調達などの面で、生物多様性保全に努めます。

### 2017年目標

#### 1. 持続可能な原材料調達の推進

#### 2. 地域の生物多様性に配慮した事業活動・社会活動の推進

各拠点が、事業場内やその周辺地域において、生物多様性に配慮した活動を行なうこと、事業場から離れた地域における生物多様性に配慮した活動を、行政やNPO等と実施することを目標にしています。

## 2016年の実績

### 1. 持続可能な原材料調達の推進

→P123「カルチャー」>持続可能で責任ある調達」

### 2. 地域の生物多様性に配慮した事業活動・社会活動の推進

#### 各拠点における生物多様性保全活動の推進

花王（ベトナム）において、工場敷地内に地域在来種等を植樹し、地域の生態系保全に寄与する活動を、2016年に開始しました。和歌山工場では、工場で利用する水の水源である紀ノ川上流において、和歌山県とともに実施している「企業の森」活動地を、2016年には2カ所に増やすことを決め、調印式を行ないました。

#### 花王・みんなの森づくり

2016年3月に、2015年度助成先として「森づくり活動」分野9団体、「環境教育活動」分野6団体、合計15団体の助成を決定しました。これまでのべ411団体を支援しています。

#### タイ北部“FURUSATO”環境保全プロジェクト

2016年は、新たに7haの土地に8,500本の植林を行いました。これまでの累計で35haに42,500本の木々を植林しています。

また、7月には、地域の方や近隣の学校の生徒、行政の担当者、タイの花王グループ社員など計660人が参加して、植林イベントを実施しました。

#### 「東日本グリーン復興モニタリングプロジェクト」を社員ボランティアがサポート

2016年は、10人の社員が現地におもむき、調査のサポートをしました。この調査で得られたデータは、生物多様性に配慮した復興の計画や、種の保全のために活用されます。

→詳細は「社会貢献活動報告書」

[http://www.kao.com/jp/corp\\_csr/social\\_activities.html](http://www.kao.com/jp/corp_csr/social_activities.html)

→P49「エコロジー」>化学物質>マイクロプラスチックビーズへの取り組み」

## ステークホルダーとの協働

花王が常に正しい方向に向かって生物多様性保全活動に取り組めるよう、2010年の活動開始以降、外部コンサルタントによる監修を定期的に受けています。

また、2008年の発足当初から参加している「企業と生物多様性イニシアティブ(Japan Business Initiative for Biodiversity: JBIB)」では、最新の国際動向等の関連情報や事務局、各社の

考え方等を自社の活動に役立てたり、自社の活動紹介等を通じ各社の活動のレベルアップに貢献しています。

さらに、地域の生物多様性に配慮した社会活動を進めるにあたり、NPO等が進める生物多様性保全活動を積極的に支援しています。

具体的な取り組み

各拠点における生物多様性保全活動の推進

グローバル

地域社会との調和を前提に、地域の暮らし・生活文化を支えている森林、河川、湿地、海洋等花王の各事業場内やその周辺エリアにて、生態系に配慮した事業活動を進めています。

花王(株)和歌山工場における防潮林の保全

花王グループ最大規模の工場である和歌山工場内にある南北1km程続く防潮林は、17世紀前半につくられたもので、今日まで地域の防災の役割を果たしてきました。また、現在においては希少となった松林特有の生態系を有しており地域の生物多様性にも貢献しています。

和歌山工場では、この松を健全な状態に保つために、富栄養化防止と、野鳥を誘導し害虫の捕食を促進させるために薬剤散布を全廃できる保全手法の確立をめざし、活動を推進しています。また、多くの和歌山工場社員、協力会社社員が参加できる保全活動プログラムの策定と実行にも努めています。

2016年は、松林ゾーンの富栄養化を防止するために、林内

に残されていた伐採木や枝を除去し、下草刈りを3回行ないました。また、遊歩道を利用したウォーキングコースを開設し、社員の健康維持やリフレッシュ、コミュニケーションの場としても活用しています。

さらに、近隣の小学校の防潮林見学を受け入れたり、小学校教員OBと協働で、防潮林の歴史や環境保全についてまとめた小冊子を作成し小学校へ配布するなど、地域の次世代教育にも貢献しています。

花王(ベトナム)に「生物多様性エリア」を整備

花王(ベトナム)では、創立20周年を記念し、社員自らが工場内に地域の生態系に配慮した樹木の植樹を行ない、「生物多様性エリア」としての運営を始めました。このエリアが社員の休息の場としても利用され、社員の生物多様性に対する認識向上に大きく寄与することを期待しています。



防潮林をウォーキング



工場内に社員自らが植樹

事業と生物多様性との関わりの把握

日本

LCAを用いた花王の主要製品の環境影響評価

花王は、「生物多様性保全の基本方針」に従い、製品のライフサイクルを通じ、製品が生物多様性に及ぼす影響を評価しています。花王は、東京都市大学伊坪教授の助言を得て、網羅的な環境影響を可視化できるLIME※1(第2版日本版被害算定型影響評価手法)を用い、衣料用洗剤「アタック」の変遷に伴う、生物多様性をはじめとする環境影響を評価し、報告しています※2。これまでに主要な35製品について環境影響評価を実施し、2016年発売の「ウルトラアタックNeo」について評価しました。その

結果、この「ウルトラアタックNeo」は、2009年発売の「アタック高活性バイオEX」と比較してライフサイクルを通じた環境影響が約26%削減していることを確認しました。

※1 ILCD Handbook, 33-36.  
<http://eplca.jrc.ec.europa.eu/uploads/ILCD-Handbook-LCIA-Background-analysis-online-12March2010.pdf>  
 ※2 Ohtawa Y.; Miura H.; Itsubo N., J. Life Cycle Assessment, Japan, 2015, 11(3), 300-307.  
[https://www.jstage.jst.go.jp/article/lca/11/3/11\\_300/\\_pdf](https://www.jstage.jst.go.jp/article/lca/11/3/11_300/_pdf)